

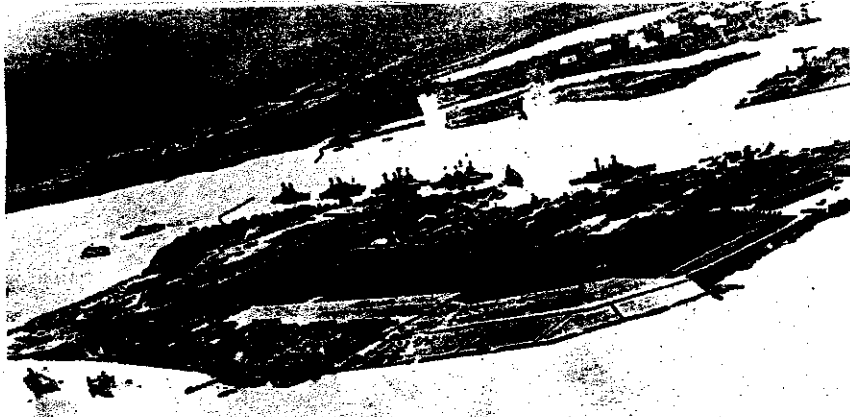
# 九条はらまち

「はらまち九条の会」ニュース No. 5 4

2008(平成20)年2月16日(土)発行

<901(延喜元)年2月16日(旧1月25日)、菅原道真が九州の太宰府に配流>

平安時代中期の学者で政治家の菅原道真は、左大臣藤原時平の讒言(ざんげん)により、この日、大宰権帥(だざいのごんのそち)に左遷された。失意のうちに903年2月25日、58歳で没した。ところが平安京では落雷や疫病も流行し、時平も29歳で急死。道真のたたりと恐れられ、その霊を鎮めるため、「天満自在天神」、天神様、また学問の神様として祭られるようになりました。



○真珠湾攻撃 対米強硬派の東条内閣の成立によって開戦は避けられないとみたアメリカは、最終回答(ハル=ノート)を提示し、日米交渉は決裂した。1941年12月8日、日本はマレー半島に上陸するとともにハワイの真珠湾を攻撃し、アジア太平洋戦争が始まった。



戦争のあつた時代に生きて

原町区橋本町 金井 武

真珠湾攻撃の軍神岩佐中佐と同じ  
群馬県前橋市に生まれて

私は群馬県の前橋市で生まれ育ちました。あえて出生地を強調するのは、私が戦争下で特別に衝撃を受けたことがあつたからです。

一九四一年(昭和一六年)十二月八日太平洋戦争に突入し、真珠湾でアメリカ艦隊を撃沈した日本の特殊潜航艇(せんこうてい)の艇長、岩佐直治中佐が前橋生まれで、軍(いくさ)の神様が前橋に突然現れたのです。街中が大きな喜びになりました。

毎日 軍神の歌を歌ったり

「軍神岩佐中佐の歌」が作られ、私も毎日のように思いを込めて唱えました。その一節、  
“香る熱(いさお)の絶筆を、  
手にせる父は微笑(ほほえ)みて、  
嗚呼(ああ)軍神の母泣かず”

## 太平洋戦争(1941=昭和16年, 12月8日)



○真珠湾攻撃 1941年12月8日、ハワイの真珠湾に停泊する米太平洋艦隊を日本海軍が爆撃した。この奇襲攻撃にアメリカ側は強く反発。「リメンバー・パールハーバー」の標語のもと、日本との戦争に踏み切った。

▲<上写真>東京書籍『図説日本史』より、<下写真>第一学習社『最新世界史図表』よりコピー。

就職し、鍛造課設計班に所属し、ここでアメリカのグラマン戦闘機の攻撃を受けました。工場の屋根が突き破られ、火が燃え上がり、退避するところでした。(裏面に)

自分から陸軍少年飛行団に入隊

“軍神岩佐中佐こそ、その名冠たり永久(とこしえ)に”  
さらに、この軍神の恩師市川直治先生が、高等小学校の私の担任教師で、名前も同じ直治でしたから大変なもので、小学生は集団で、岩佐家と墓参りに日参しました。でも、その時の両親の対応に違和感を感じましたが、私たち子ども心にはその気持ちを推測することは全くできませんでした。  
一方、学校では、軍神に続けとばかりの教育指導の連日、私も陸軍少年航空兵に親の許可なく志願し、受験しましたが、体が小さかったからか、「乙合格」場合に依つては召集するかも知れないから待機するよう」-との結果で、高等小学校を卒業したので、前橋郊外の軍需工場に

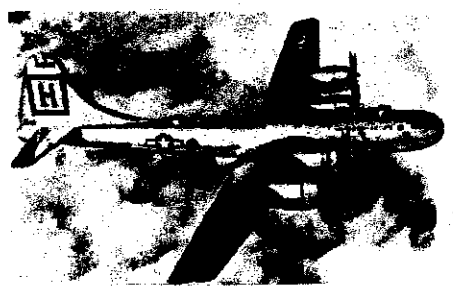


私は戦時下で食事も満足に食べられないので大変ひもじい思いで、「空襲警報」になり全員が工場外に避難したところで、工場の食堂に侵入し、腹一パイ食べた時は、命は二の次でした。その後は食堂では見張り一人は残る様になりました。

**前橋空襲 母と二人で 炒豆とバケツを持って逃げる**

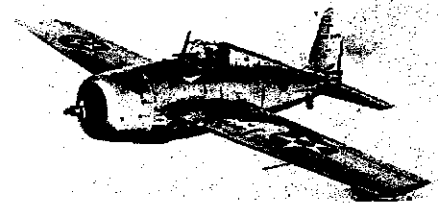
いよいよ戦闘が激しくなり、一

↑昭和20年8月5日夜の、「前橋空襲の日」のスケッチ。金井さん自身が当時を思い出して描かれたものです。



(日本を爆撃するB-29)

▲「B29」は、Boeing B-29 Superfortress (ボーイング29スーパーフォートレス)「超空の要塞」という意味のアメリカ・ボーイング社製の大型長距離爆撃機。全長30m、全幅43m、爆弾搭載量9トン、乗員10名。4発のプロペラをもち、航続距離4585キロm。最高時速576キロ。終戦間近の1944年6月初出撃し、3月の東京空襲、大阪空襲、前橋空襲はじめ、広島へ原爆投下の「エノラ・ゲイ」、長崎原爆投下の「ボックスカー」など、全国各地の都市空襲で猛威をふるった。高度1万mを飛行できる高性能のため、この高度を飛べないゼロ戦などの日本の戦闘機はまったく歯がたたなかった。



▲「グラマン機」(F4Fワイルドキャット)も全長8.5m、全幅11.6mの小型の戦闘機で、低空からの機銃掃射で恐れられた。昭和20年8月の原町空襲(無線塔・原町紡績工場・原ノ町駅)もこの機による。

**もっと早く終戦を決断していれば どれだけ多くの人々が助かったか**

これらの敵の攻撃に対して日本軍は何の対抗もなく、空襲が終わってからは、探照灯で空を照らしただけ。これが戦争末期の状態で、八月十五日が戦争終結となり、あと十二、三日早く終戦を決断していれば、どれだけ多くの人達が助けられたか、残念の極みです。(「はらまち九条の会」会長)

九四五年(昭和二〇年)八月五日、前橋が夜の九時五十分頃からB29爆撃機の来襲で、焼夷弾(しょういだん)が投下され全市火の海。私は母と二人で大豆の煎った物の布袋一つとバケツ一つを持って逃げました。バケツは火をかぶったら防火用水を汲んで体にかけるために、豆は当面の食糧、あとのことは何も考えられませんでした。この一晩で、前橋の八割が焼失しました。アメリカ機からピラが撒かれた人の噂では、この空襲に前もって、アメリカ機からピラが撒かれたのとこの「前橋良い」とこ糸の街、五日を過ぎれば灰の街」。このあと八月十日にはすぐ隣の伊勢崎市が空襲に遭い、「伊勢崎良い」とこ機織(はた)の街、十日を過ぎれば灰の街」。その通りの結果となっていました。

**佐藤邦雄さん、戦争体験・「子どものころ戦争があった」を出版**



「私の戦争体験」第12回(ニュースNo.50)に寄稿された佐藤邦雄さん(九条の会会員)は、昨年10月に<左コピー>の本(B5版・240ページ)を出版されました。佐藤さんは昭和7年、安達郡太田村(現二本松市)に生まれ、「私の戦争体験」第12回に書かれたように、「戦争のあった時代に育ち、敵が攻めてきたり爆弾を落とされる心配のないところでも、戦争は人々の暮らしや心の中に影を落としていた」こと、「自存自衛の戦争だったのか」「アジアの解放・独立の戦争だったのか」などアジア太平洋戦争の実相を、生き立ちを述べつつ淡々とした筆致で静かに綴られています。大変読みやすく一気に読破させられ、大きな感銘をうけ、会員の皆様にもご推薦申し上げます。希望の方は、直接佐藤邦雄さん(975-0005 南相馬市原町区二見町1-13・TEL0244-24-2158)へお申し出をいただきたい、とのこと。